ぬい針のできるまで

針づくりは、今ではほとんどの作業が機械で行われています。ここでは、ぬい針づくりの手順を簡単に紹介(しょうかい)しましょう。

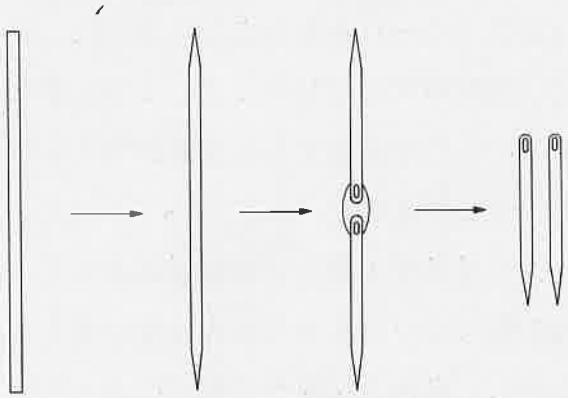
① 材料になる針金を、針２本分の長さに切っていきます。

② 切った針金の両端をとがらせます。

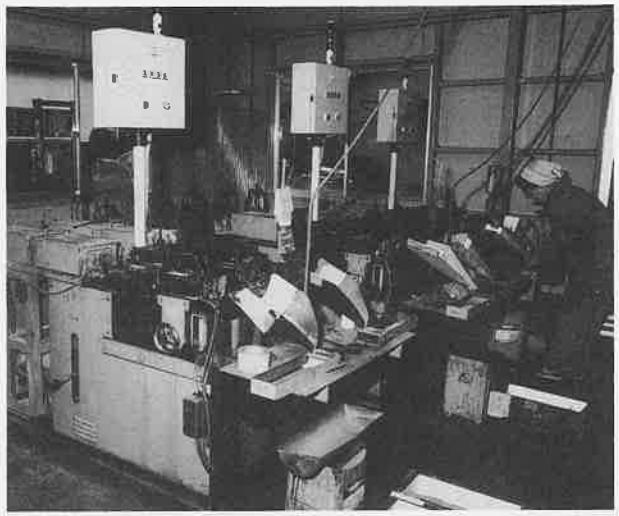
③ 針金の中央を平たくして糸を通す穴を２つあけたあと、２本の針に切り離します。

④ 硬さとねばり強さをつけるために、熱を加えます。

⑤ 全体をみがき、メッキをかけてできあがりです。



針金からぬい針へ



針金を針２本分の長さに切る機械

最初のミシン針工場

わが国で最初にミシン針の工場をつくったのは、広島の人で、昭和のはじめのことです。当時ミシン針は外国から輸入されたものが使われており、貴重(きちょう)なものでした。そこで、広島のぬい針づくりの技術を生かしてミシン針をつくることになったのです。

学習の手引

第16号

針づくり

きりで針の穴をあけているところ
『縫針の縁起』(田村雅人氏蔵) より

広島市郷土資料館

〒734 広島市南区宇品御幸二丁目６番20号

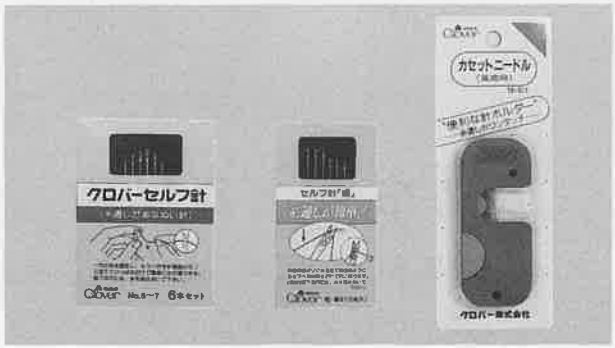
☎ (082) ２５３-６７７１

広　島　の　針

小さくて細い針。しかし、針は私たちの暮らしになくてはならないものです。広島はその針の日本一の産地なのです。衣服をぬうためのぬい針は全国の100%、布をとめたりぬう時の印にしたりするまち針も100%、ミシン針は50%を生産しています。

このほかに編み物に使うかぎ針もつくっています。これらすべてをあわせた生産量は、年間17億８千万本にのぼるといわれています。このうち、70%以上が輸出されています。（数字は平成３年度のもの）

さらに今では、こうした針づくりの技術を生かして、針以外の新しい製品づくりを手がける会社もみられます。



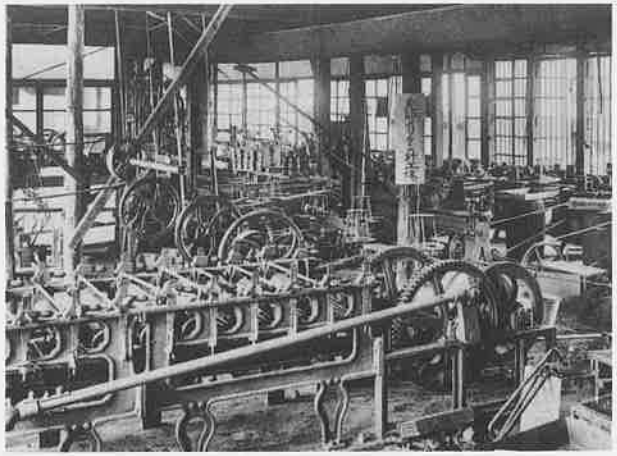
最近のぬい針セット

針づくりの歴史

広島県北部では、古くから鉄の生産が行われており、この鉄を材料にしてさまざまな製品がつくられてきました。針もその一つです。広島の針づくりは、江戸時代に、長崎からぬい針づくりの技術が伝えられたことにはじまるといわれています。

明治時代になっても、ぬい針づくりはまだ手作業で行われていました。広島にぬい針づくりの機械が入ってきたのは、今から100年くらい前のことです。

大正時代に入り、第一次世界大戦がはじまると、ヨーロッパからぬい針が入らなくなったアジアの国々が、日本へぬい針をたくさん注文してきました。このため、日本の針の生産地は活気づき、特に広島での生産量はいっきに増加しました。



ぬい針工場の様子（明治時代）
田村雅人氏蔵

ぬい針を包装しているところ（大正時代）
田村雅人氏蔵

なお、この時代には、ぬい針のほかにまち針もつくられるようになりました。さらに、昭和時代のはじめには、ミシンが普及するにつれて広島でミシン針がつくられるようになりました。

太平洋戦争末期の原爆被爆によって、広島の針づくりは大きな被害を受けました。しかし、戦後の復興への努力によっていち早く生産が再開されました。